

拳拳服膺せよ、明治リアリズムの遺訓

朝鮮半島を

大陸国家にしてはならない

福澤諭吉、陸奥宗光、小村寿太郎が喝破した
東アジア危機の構図が、いま長き眠りから覚める

わたなべとしお
渡辺利夫

せきかわなつお
関川夏央

拓殖大学学長

作家

悪友を謝絶するものなり

関川 渡辺さんの新刊『新 脱亜論』

(文春新書)は、日本の近現代史を、主に戦争を中心に再編集しようという試み、そんなふう理解了しました。そのモチベーションは、いま日本を取り巻く地政学的な状況が、『坂の上の雲』で司馬遼太郎が描いた日清・日露戦争の時代に回帰しつつある、という危機意識です

ね。

渡辺 福澤諭吉が「脱亜論」を『時事

新報』の社説として発表したのは明治十

八(一八八五)年ですが、福澤はそこで

「我れは心に於て亜細亞東方の悪友を謝

絶するものなり」と断じています。日本

が生存していく唯一の方途は、「西方」

の近代諸制度の摂取につとめ、不羈の自

立心をもって列強の「東漸」に立ち向か

うことである、と福澤は考えていまし

た。そうした気概を共有しようとしな

清国、朝鮮はもはや「悪友」にほかなら

ず、絶縁もやむなし、とみなしたわけで

す。日清・日露両戦争に勝利し、朝鮮半

島から清国、次いでロシアの影響力を排

除することにより日本は自立の道を確保

したのです。

かえりみて現代は「グローバル化の時

代」。福澤のような自立への意識が希薄

になっていきます。しかし俯瞰してみれ

ば、北朝鮮、韓国、中国、ロシアといっ

た国々は十九世紀的なナショナリズムを



たぎらせ、日本を標的とした挑動的な外交を展開しています。その中に、「ポストモダン」の日本がぼつんと孤独に位置しているというのが現在の極東アジアの構図ですよね。明治国家を深く悩ませた地政学的構図を再現しているにもかかわらず、日本人はこれに立ち向かう気概をもてないでいます。

関川 日本を取り巻く状況は非常に厳しいのに、それに対して現代の日本人はあまりに無自覚にすぎる。渡辺さんの少なからぬ苛立ちと憂国の思いを共有しました。私もずっと同じことを考えており、読んでいて胸のすく思いがしました。けれども、この本をぜひ読ませたい、二十五歳から三十五ぐらいまでの青年たちが、ちゃんと受け取ってくれるかどうか、一抹の危惧を禁じ得ません。もちろんそれは著者の責任ではありませんけれども……。

渡辺 私は毎日のように大学生に接していますが、近頃の学生から感じるのは、中国、韓国、北朝鮮からの侮辱的な扱いに対する反発が、次第に高まっているということだと思います。これが黒々とした大

し、歴史学の変化はまことに鈍い。愕然とさせられました。こういう本を歴史の専門家ではない私が書くのも、そんな次第で意味があることなのかもしれないと意を強くした次第です。

司馬が描いた物語

渡辺 私自身、学生時代は歴史オンチで、歴史好きの友人が集まる席では肩身が狭い思いをさせられました(笑)。そんな私に近代史をストーリー性をもって教えてくれたのは、『坂の上の雲』をはじめとする司馬遼太郎の諸作品ですね。歴史観のまったく異なる空白の世代に、近代日本という豊かな物語を注ぎ込んでくれたのは学者ではない。司馬とい

きな塊にならないとはいえません。

私は戦前の昭和十四年生まれ。小学校に入ったのが終戦直後という世代ですが、学校で習った近代史といえば、負の価値に色づけられた東京裁判史観、左翼史観ばかりでした。アジアの至るところで日本はひどいことをやったのだという強力な刷り込みでした。だから、われわれの世代から、団塊の世代、あたりまでの人間は、中国や韓国、北朝鮮の冷たい仕打ちを「いたしかたなし」と受け取る諦めの感覚がある。何を言われようとしても言えないといった感じですね。

しかし、いまどきの大学生となると、そうした後ろめたさの感覚はまったくありません。中国や韓国から歴史認識問題などを突き付けられると、「どうしてここまで言われなきゃならないんだ」と、理不尽きわまりない印象を受けるらしい。これがいま「嫌韓」とか「反中」といった形で表出しているのだと思います。私はこれを非常に懸念しているわけです。

情念の政治化は実に危ういものですね。たとえば、北朝鮮が日本に核攻撃のう一人の小説家だったんですよ。日本の近代史はこの人によって「救出」されたんじゃないでしょうかね。

関川 私が司馬遼太郎作品と出会ったのは、だいぶ遅くて八〇年代なんです。影響を受けたのは中央公論社の『日本の歴史』二十六巻でした。私はこのシリーズを、まず第一巻から読み、次に最終巻から逆に読み直した。そういうことを二度繰り返しましたが、もっともおもしろかったのは江戸時代を記述した七冊で、江戸時代は、後れた時代、ではないということにはじめて気付きました。封建制をバカにする、というのが五〇年代、六〇年代的教育の核だったわけですね。ところが実際は封建制がなければ明治の近

習しをかけてきた場合、日本は一挙に排外主義に傾き、軍事大國化に走り、核保有の選択をする可能性が高い。軍備増強も恰情に情勢を判断した上でのことならばいざ知らず、情念のおもむくままに核保有などに至ったら日本の自滅です。

関川 たとえば中国が日本を口汚く罵るのはなぜか。要するにそれは彼らの自己都合なんだということを、まず認識してもらい必要があるですね。中国が大衆的なレベルで日本に悪口を浴びせるようになったのは九〇年ごろからです。それまでは日本に対して、さほど露骨な批判はなかった。つまり、共産党支配が壊れつつあるなかで、外に敵を求め、日本を攻撃せざるを得ないわけです。

渡辺 『新 脱亜論』を執筆する際も、現代の日本の歴史学者がどんな歴史解釈を伝えているのかを、できる限り調べましたが、いまだに七、八割の研究者は東京裁判史観、左翼史観の信奉者だづくづく思わされました。私の本来の専門である経済学ではフロントラインのセオリーが変われば、あつという間に全世界の研究の趨勢が変わってしまいます。しか

代化はあり得なかった。むしろ封建制の成熟と日本型近代の成立は同義だった。そこに欠けていたものは蒸気機関と海軍と植民地だった。そんな日本型近代を西欧型近代に緊急避難的に乗り換えざるを得なかった、それが明治維新だという道筋が見えてきたんです。そういう目で、司馬作品を読むと、彼の功績のひとつは封建制の肯定だと思われてきます。たとえば、紀行シリーズ『街道をゆく』は、端的に言えば封建制讃歌ですね。

渡辺 私の大学時代はマルキシズム全盛期。大学の基本テキストはマルクスの『資本論』で、「歴史というものは段階を経て発展していくものだ」と教え込まれました。日本は江戸時代の暗黒の封建制を克服して、資本主義的な社会に生まれ

変わった、というわけですね。

昭和四十(一九六五)年にエドウィン・O・ライシャワの『日本近代の新しい見方』が出て、目からウロコが落ちる気分を味わいました。当時としては画期的な日本史理解を示した本でしたよね。江戸時代を土台として明治があったという今からみれば当たり前の主張ですが、この主張が私にショックを与えたというのですから、歴史を「断絶」とみるマルクス主義がいかに強力であったかを証すような話です。江戸時代に日本の教育制度はすでに完成の域に達していた。全国に通用する貨幣制度も生まれていました。街道などの社会的インフラも整備され、回船による海上輸送網もできました。あるいは工場制手工業も資本主義的工場制度の域に近づいていた。ありとあらゆる近代的要素は、じつは封建時代に萌していたものだとライシャワは主張したのです。しかも封建制は、中央集権でなく地方分権が基本。それぞれの地域で独自の改革と刷新が進められ、そのエネルギーが明治維新をきっかけに一挙に全国的

な規模の殖産興業、富国強兵へとつながった。私を多少なりともまっとうに変えてくれたのは、司馬と並んでライシャワです。

関川 ライシャワや、英国の比較社会学者R・P・ドーアによる日本史研究は先駆的でした。いま私は、なかば本気で「廃棄置藩」すればいいと思っているのですが(笑)。

渡辺 江戸三百年のパーフェクトな平和のあと、幕末、開国維新期に至って、突如としてあれだけ巨大な力を結集できたのは、日本に特有なメカニズムの働きがあったのでしょね。地方ごとにユニークな文化、芸術、学問、軍事力が育っていたことが日本の強さではないでしょうか。封建制と王朝支配との決定的な違いがここにあります。王朝支配の典型が朝鮮ですよ。現代でも韓国では、日本のような地方物産は見当たらないんですね。

関川 よく言われるのは駅弁とその土地の名産品がないこと(笑)。中華帝国も中央が異様に強く、地方に見るべきも

のがないという点では同じ構造といえるでしょう。一方、日本は東アジアの縁辺にあって、まったく東アジア的ではない。本来、地方が多様かつ豊かでした。

渡辺 封建制の重なりの上に近代国家が存在するわけで、王朝の上に近代国家は成立しません。これは梅棹忠夫の『文明の生態史観』の主張のエッセンスな部分です。昭和三十二(一九五七)年の『中央公論』に掲載された論文ですが、東洋と西洋、あるいはアジアとヨーロッパという思考軸に慣れ親しんできた日本人に、新しいものの見方を投げかけてくれた名論文です。

梅棹によれば、旧世界において高度な文明を築くことに成功したのは日本とヨーロッパの数カ国。これらと中国、東南アジア、インド、ロシア、イスラム諸国との間には顕著な格差がある。梅棹は前者を「第一地域」、後者を「第二地域」と名付け、対比的にとらえています。第二地域はユーラシア大陸の中央部に大きく広がり、第一地域は巨大大陸の東と西の端に小さくくっついている。第

二地域の性格を規定しているのは、ユーラシア大陸中央部を走る巨大な乾燥地帯です。大陸のある地域で文明が栄えると、乾燥地帯から激しい破壊力をもった遊牧民が出てきて、暴力的支配を行う。それを際限なく繰り返してきたためにユーラシア大陸ではいつまでたっても発展がみられない。彼は「中央アジア的暴力」という言葉を使っています。第一地域の日本と西ヨーロッパは、このユーラシア大陸中央部から地理的に遠かったために中央アジア的暴力の被害を受けることなく穏やかに発展することができた。それゆえ日本と西ヨーロッパは「オートジェニック(自成的)」な発展が可能であり、

他方、第二地域は外部からの圧力によ

て動かされることが多く、「アロジェニック(他成的)」な存在であったと梅棹はいうわけですね。

アジアという思考軸は終わった

関川 渡辺さんは『新 脱亜論』に梅棹さんの印象的な言葉を引いておられますね。宮沢喜一内閣のとき、アジア太平洋問題に関する懇談会で、ゲストスピーカーとして招かれた梅棹氏が突然、こう切り出す。「日本が大陸アジアと付き合っただけでいい、というのが私の今日の話の結論です」と。渡辺さんも含め、委員全員があっけにとられた(笑)。改めてこの発言を『文明の生態史観』の

文脈のなかに置いてみると、その意図するところは、じつによくわかります。

渡辺 とはいえ、論文発表当時、梅棹文明史観はアカデミズムにさしたる影響を与えなかったようにみえます。「東洋対西洋」というイメージが、それだけ強力に日本人に刷り込まれていたということなのでしょうね。しかし、梅棹史観がインパクトをもつのは、むしろ今後じゃないかと私は思っています。いま日本が悩んでいるテーマは、中国、朝鮮半島、ロシアとの関係ですが、これまでわれわれは自らをアジアの一員として位置づけ、「東洋対西洋」とか、「アジア対ヨーロッパ」という思考軸で外交問題を捉えてきたわけです。しかし梅棹の

いう第一地域と第二地域、つまり「大陸国家と周辺国家」という対立軸で捉えた方が実情に即しているのではないか。日清・日露戦争がまさにそうでしたし、現在の極東アジア地政学の基本もそういうことですよ。

日清・日露両戦役は明治前期の日本の、唯一の活路でした。李朝末期の朝鮮は清国の宗属国でした。朝鮮は内乱や政争が起こるたびにその鎮圧を求めて清国に派兵を要請、大量の清兵が国内に駐留しているという有り様でした。隣国がこの状態では日本の安寧は保障できない、と考えて清国との戦いに打って出たのが陸奥宗光です。

日露戦争も同じような構図です。遠因は義和団事変。これは排外主義的な新興宗教集団が北京で起こした騒擾でした。この乱の鎮圧に当たったのは北京に公使館をもつ八カ国の連合軍だったのですが、ロシアは乱鎮圧後、満州に居すわってしまっただけで朝鮮半島と近接していませんから、朝鮮半島もロシアの支配下に入る危険性がある。その危険を払拭せ

んとして、外相小村寿太郎の指導の下、始められたのが日露戦争ですよ。

閔川 朝鮮半島が「大陸」になるのか、「周辺国家」になるのか、日本の死命を制する問題であると、福澤だけでなく、陸奥や小村といった人々は明確に認識していた。翻って現代はどうか。渡辺さんが指摘されている通り、基本的構図は全く変わっていませんね。しかるに朝鮮半島は「大陸化」しつつある。

渡辺 陸奥宗光や小村寿太郎が直面した危機はいまもつづいていっているわけですね。

閔川 大事なことは、「日本は大陸ではない」という事実の再認識です。われわれは明治以来、「日本はアジアだ」と信じ続けてきた。広い意味ではそういえなければ、今後は「日本は大陸ではない」という側面をもっと若い世代に向けて強調していかなければならないでしょう。

渡辺 そう思います。私はアジア研究をやっている人間だと言われますが、果たして「アジア研究」なんてあるのか、

というのがいまの気分ですね。

閔川 朝鮮が「大陸」なのか、「周辺国家」なのか、という問いは、朝鮮自身にとっても非常に大きなテーマです。現在、朝鮮半島は経済的には発展しているのに、政治的に混乱している。おそらく、これは中国との関係が深まったことが原因だと思えます。最近までは、皮肉なことに北朝鮮が中国現代史の混乱の浸透を妨げる分厚い壁として、立ちはだかってくれていた。要するに、韓国は島国としての繁栄を享受することができた。その島国としての繁栄を設計したのが朴正熙ですね。一九六一年からの二十年弱で国民所得を約二十倍にする「漢江の奇跡」を成し遂げた。しかし、またまた皮肉なことに、八〇年代後半以来の「民主化」の波の中で、大陸への「本封還り」がはじまってしまいました。

渡辺 「漢江の奇跡」を可能にした最大の要因は、輸出の顕著な増加でした。主要なマーケットはアメリカであり、資本財は日本から輸入しておりました。朴正熙は「海洋国家・韓国」を創ろうとし

ていたのです。ところが、冷戦崩壊後、韓国は半島統一にこだわり、中国に擦り寄るようになる。朝鮮半島に伝統的な「事大主義」、大に事える思想に戻ってしまった。朝鮮半島が日本にとって決定的に重要なポジジョンであるという構図は今後とも変わりようがありません。ならばこの先、何が日本の外交戦略のポイントになるかというと、朝鮮半島を「海洋国家」の側に引きとどめるか、あるいは「大陸国家」への変貌を許容するか、その二者択一の中にあるのでしょね。

いま韓国では牛肉の輸入再開をめぐる反米気運が盛り上がっていますが、米韓の絆が緩めば日韓の関係は強くなるかなければならない。これが国際政治の力学です。米韓関係の冷却化は日韓連携強化のチャンスでもある。でも、それをチャンスと考えている外交官がいるのでしょうか。

閔川 陸奥や小村ならそう考えたでしょうね。そういった思考を阻害しているのは、戦後という時代の流行思潮をいまだに払拭しきれずにいるからですよ。

渡辺 まったくそうですね。この空気が

を変えることがいちはん難しい。

閔川 三十年経ったら、過去は歴史にしなければなりません。どんなに長くても五十年……六十年も経つというのに先の敗戦が歴史にならないのは、われわれの怠慢です。一方、コリアがそれを歴史にしないのは、自己都合にすぎないでしょう。

「李朝の精神」の不気味

渡辺 二〇〇四年、韓国議会はほぼ清場一致で「親日・反民族行為真相糾明特別法」を成立させました。新聞で読んでも、何をまた冗談を言ってるのかと思いましたが、冗談じゃなかったんですね。

一九一〇年の韓国併合以来の三十六年にわたる日本統治時代、「対日協力者」が何をやったか、その事実を糾明して、その子孫を罰しようというとてもない法律です。遡及処罰を禁じた近代法の精神の蹂躪です。百年近くも前の罪をできたの法律で罰しようというのですから。しかも当人ではなく、その子孫をです。実際、日韓併合時の首相・李完用の孫の

土地、日本円にして何億円という土地を没収したりしています。韓国は姿かたちはあれだけの近代国家になり、サムスンを見てもわかる通り、産業技術においても世界でも重要なポジジョンにきています。しかし韓国人の意識下にある情念は前近代からなにも変わっていないのかも知れませんね。

閔川 それは「反日」じゃないのだと思いますよ。つまり自分たちが歴史に対していかに無力だったかという空虚感を埋める代償行為ではないですか。遡及立法で子孫を罰したりするのは「歴史」そのものの否定ですけれども、彼らは、朴正熙以外に革命をしたことがないというさびしさを埋めたいのだと思います。

渡辺 対日戦争をしたことがないことも、恥ずかしい。

閔川 だから、金日成政権に正統性があるという物語を信じようとしてきたりもするのです。「民族主義」とは罪な流行です。「敵」がいなくなると無理にでも「敵」をつくる。ソウルの超近代的な風貌の裏に、「政敵」は三代のちまで罰したり、ソウルの「龍脈」を日本が切断

したと言説にみられるような「李朝の精神」が潜んでいることがなんとも恐ろしい。やはり大陸なんですかね。

巨龍の軍事浪費は続く

渡辺 共産中国の悲劇は、大清帝国時代の、歴代王朝の中で築かれた最大の版図を継承してしまったことでしょね。清の一代前、明期の領土は、長城から南、チベット高原の東端から東です。モンゴル、チベットはもちろん入ってないし、東トルキスタン、いまの新疆ウイグルも含んでおりませんでした。今の中国の半分くらいだったんですよ。中央政府にとってもそれくらいが統治可能な限界なのでしょね。ところが大清帝国は、康熙帝、乾隆帝の時代にあの広大な版図へと拡張してしまったわけです。中華人民共和国は、チベットやウイグルの自治区で頻発する独立運動を収束させるのに多大なエネルギーを使う、その意味での「消耗国家」のように私には見えます。

関川 新疆ウイグル、チベット、内モ

ンゴルに旧満州まで加えたら、いまの領土の半分に相当しますね。

渡辺 もっと小さな国土の中で社会を成熟させていくほうが、選択としては賢いのでしょね。考えてもみれば、旧ソ連は解体し、ずいぶん楽になったといえませんか。本家本元のロシアを成熟させていくことが可能になったわけですから。あのまま、バルト三国からコーカサス、中央アジアまで、全部を抱えていたら、その重さに耐えられなかったんじゃないかしらね。国家、諸民族には、ある適正規模があるんじゃないか。

関川 ありますね。人口密集地なら五十万平方キロを超えると、もう危ない。九百六十万平方キロは困難でしょう。その意味で江戸期日本の「藩」のサイズは示唆的です。

渡辺 台湾問題もそういう観点から捉えたらおもしろい。あれだけ高度な技術を持ち、社会の成熟度、住民の民度も高く、ガバナビリティーもしっかりしている社会を統合するとなれば、中国は多大なエネルギーをそれに割かざるをえませ

ん。軍事面だけみれば、台湾領有のメリットは多大だが、国民国家のありようを総合的に判断すれば、台湾統合はどうもコストが大きすぎるという結論になるのではないか。

関川 それに同じ漢族とはいっても、台湾住民の多くは南方人。共産党的な発想になじみやすい北方人とは、気風がまるでちがいます。日本統治が終わったあとの混乱期、台湾の女性たちは、新たに乗り込んできた国民党兵士と結婚するのをいやがりました。日本人のほうがまだましだ、といつて(笑)。

渡辺 香港は簡単に統合できました。香港は長くイギリスの植民地だったうえに、その住民は上海や広東からの避難民が大半です。台湾人のように、国土に愛着を持ち、自ら民主主義を育て上げるような気運は香港には育っていませんでした。香港住民は、当面の利益が守られるなら、中国がイギリスにとってかわったとしても、痛痒をさして感じたわけじゃありませんよ。

関川 イギリスの植民地経営はごくド

ライなもの、日本が台湾で実践したような親身の開発援助とは全然違っていました。イギリスが植民地に指導階層のための大学をつくっていないのは象徴的です。有為のインド青年はオックスブリッジに留学するしかなかった。対して、日本は台湾と朝鮮に帝国大学を作った。この違いは大きい。

海洋南北同盟しかない

関川 最後に、今後の日本の国際協力関係のあり方についてですが、大陸中国との連携が日本にとってあまりにリスクが大きいとすると……。

渡辺 麻生太郎元外相が唱えた「自由と繁栄の弧」の構想は、なかなか面白いものでした。北東アジアから中央アジアを経て、東欧へと、ユーラシア大陸外縁の新興民主国相互の間で協力体制を築こうというものです。しかし、現実には、いままで述べてきたような理由で、大陸国家との連携は、私には賢明な選択とは思えません。

関川 それでは、海洋部分を南北に貫

くかたちの同盟を構築することは可能でしょうか。いわば「海の同盟」——。

渡辺 もちろん今後も日米同盟が最重要の基軸であることに変わりはありませんが、戦後六十年にわたって友好関係を築いてきた台湾、ASEAN諸国、インド、相性のいいオーストラリア、ニュージーランドとの関係をもうひとつの連携軸にしていくという道を探る必要があると私はみています。「南北連携軸」ですね。オーストラリアとのあいだには、二〇〇七年三月、「安全保障協力に関する日豪共同宣言」が結ばれています。法的拘束力をもたぬ条約ではありますが、日本が日米同盟以外にはじめて結んだ、半同盟関係、だといえます。インドとの関係を深めていくこともだんだんと重要になっていくと思います。

関川 インドと中国の摩擦はずっと続くとお思いますね。中国は国家ではなくて「天下」であるように、インドもまた一つの「世界」。水と油のように異質な印中が同盟を結ぶなんて、想像を絶することです。

渡辺 やはり「南北連携軸」によりユ

ーラシア大陸国家を牽制する、という安全保障のあり方が、与えられた選択のなかで最善なのではないでしょうかね。

関川 大陸重視の外交を貫く福田首相は「相手の嫌がることはしない」のがモットー。あまりに安穏とした姿勢に拍子抜けします。彼は読書好きだというのが、梅棹の名著を読んでいないのでは(笑)。

渡辺 そもそも外交には、不条理に満ち満ちた国際権力闘争に勝つための戦略が欠かせません。国家の生死を賭したサイバルレースを勝ち抜く気概が求められます。「ポストモダン」などという呑気な気分では、アジアの中でまっとうな地位を築くことは難しい。生き残りを賭け、利害の一致する国と友好関係を構築すべきは言うまでもありませんが、さらに同盟関係においても積極的にイニシアチブを握りにいく必要があります。

関川 日本が日露戦争に勝利し、その後二十年間の平和を確保できた背景には日英同盟があった。現代の政治家も、明治人が持っていたリアルな国際感覚を取り戻してもらいたいものです。「戦後」はどうに終わっているのですから。